

砂坂

— 実話にもとづく物語 —

陽田麻里

私は、精神障害者2級です。今年の8月で20年も福祉のお世話になっております。

精神薄弱として生まれ育った私の集大成です。

あまり馴染みのない言葉も飛びかいますが、精神患者として心ない噂により市内では超有名人となり、どこへ行っても特別視され行き場のない道をさまよって来た私。この世に生を受けたら嫌でもその人生を歩まねばなりません。

精神患者というだけで、誤解や無理解を招き健常者と共存できないまま一生を終わるのはしのびないです。「喜び」とは何か。「病苦を忘れる時」とはどんな時か。向き合う気持ちは健常者と変わりありません。

目次

第一章 幼き日 3

第二章 青春時代 16

第三章 社会の荒波のなかで 26

第四章 茨の道 53

第五章 日々を綴る 79

あとがき 194

第一章 幼き日

一. 病院通い

平成4年、ストーカー被害によるパニック障害をきたし初めて精神科の門をくぐった。

高校を卒業して2年。洋裁士をしていた母は7歳年上の時計の営業マンをしていた父の下へお嫁入り。集落は兼業農家ばかり。父は母方の実家に養子として迎えられ、曾祖母は母を嫁に迎えると一切の仕事を放棄。私が49歳になるまで語られる事のなかった、作らなかった物はお醤油ぐらいの物！そして前日まで畑仕事をしていた母の下に昭和36年11月15日、麻里の誕生。

私は一向に歩く兆しがなかった。何処の病院へ行っても栄養不良といわれるだけ。また両目

はいつも涙目で目ヤニが出ていた。近くの眼科の紹介で隣町で診てもらったところ「涙腺炎」である事が判明。涙道である鼻の途中が塞がっており、そこを定期的にプジョーという棒で麻酔もかけず貫通手術を受けていた。一度は目のフチが腫れあがり皮膚が破裂。そこを紹介された先生は会うと必ず泣かれていた。21歳になるまで、一日には何十回も膿を押し出していたが、そのせいで目の下にはは大きなクマが出来ている。

一向に歩けなかった私は手だけでズルズル移動。ある日知人の娘さんの足を見た父はワラにもすがる思いで紹介された病院へ行き、そこで私の病気は「先天性股関節脱臼」と判明。それから月1の割合でギプス治療に百kmの道のりを通った。ギプス交換の際、皮膚まで剥がれそれを堪えて見られなかったという。父は大工をしていた友人に頼み、前は机の台になっていた両股開きの足がすっぽりはまる椅子を作ってもらった。歩けるようにはなったものの、重い荷物を持つたり激しい運動は避けなければいけないような後遺症が残る。そして右耳が難聴。何故か全身はいつも痺れていた。

二. 小学校時代

父は秀才で学校時代は級長、生徒会長も歴任。私は蛙の子は蛙だろうという好奇心な目にさら

され、そして幼き日のことを「神童」という言葉がひとり歩き。幼稚園へあがる前は曾祖母に預けられ、いつも駄菓子屋へ連れて行かれてグリコのおもちゃ付きキヤラメルを買い与えられ、おもちゃはご近所の男児にごっそり盗られて虫歯だけが残る。そして度々近くに住む従兄が面倒を見てくれたが遊びに飽きると必ず、「注射に行ってくるから」。

父はその頃から公民館長を一期と民生委員を一期。私は人見知りが激しく幼稚園へは「行かない」とダダをこね、お弁当包みは明けなし「溜まっているでしょう」と膀胱を押される子だった。そして小学校へあがった時も「行かない」とダダをこね、集落の何処ぞに立ち往生している子だったという。

運動会の日が一番苦痛だった。可哀想だったのは朝早く起き皆のお母さんがそうするように母がお弁当作りをする事だった。小学1年のあの時だけブルマーをはいた。銃声が鳴った。走った……。だけど私は10m地点で立ち止まった（このまま走って良いものか）。すると担任の女先生が手を引いて走ってくださった。でもその日を境に体育の授業に呼ばれがなくなつた。

1年生というと何かと手を拱ねいたそうで、特殊学級へのお誘いも度々あったがその頃始めたお習字が先生の目に留まり大変救いとなった。51歳になった私に母は、

「小学校時代、何が得意だった？」

母はその2年前より曾祖母のお下の世話をしていたが、

「お義母さんはお見舞いにみえても、一度として代わりを務めてくださった事はなくて」

私が49歳になるまで語られることのなかった母の愚痴。母が少し席を外すと、

「シンしゃーん（父）、セツちゃーん（母）、マーしゃーん（私）」

卸屋の園屋さんからは、「カラスが鳴いていた」

曾祖母は一ヶ月に1回という便秘がちだったのが寝たきりとなってから毎日快便。そして曾祖母はその年の大晦日に他界した。

2年生にあがると、食いしん坊の私にうってつけの国語の授業があり、トラが尻尾を追い駆け回りバターとなってホットケーキとなった物語。その夏の昼下がりに、私に8つ違いの待望の妹「梨茂」が誕生。絵日記にはウソの報告を。実際は禿げ頭。

3年生にあがると、最初の超常現象が起こる。2畳の勉強部屋で男性の異様な叫び声を耳にする。その時ピカッとこめかみに爆撃を受けた男性の姿が。恐怖で卒倒しそうだったことを思い出す。男性は陸軍の兵隊さんだった。その頃から度々金縛りに遭っていたが父も有ると言うので特別な事ではないと安心。

4年生にあがると、度々腹痛を起こし保健室へ入り浸り。便秘がちだった。2歳の誕生日を前にしていた梨茂は、何でも「私がする!」。保育園行きのバスでは、自分の胸辺りまである

ステップに、「鳥井のおばさんは、私は出来るのに乗せてくださるのよ」

衣服のボタンをつけてやっても、もう一度はずしてつけ直すという徹底ぶりだった。そして、いつもすり減ったサンダル履きで泥んこ遊びに興じていたが、そこには申し訳ない私がいいた。最初の子だった私に父はピアノや電話やだるまさん人形などありとあらゆるおもちゃを買い与えていた。梨茂は2回だけおねだりをした事があった。父が選挙発表を見に梨茂を連れ立って行った時、片隅に小さなお店を発見。父に「パンクックが欲しい」「パンや?」「じゃんか(違う)パンクック」当時テレビでは「ファンタックティック」というCMが流れていた。それと紙製の鯉のぼりを買ってもらった。

その頃私は、ぶつつけ本番で縫ったパンダの刺しゅうに赤鬼そっくりな男の先生から最高得点をもたらした。この先生、作文コンクールに校長先生とバレエをやったと書いただけで廊下の掲示板に貼り出された。

5、6年生になると、クラスの女子からおねだりされる子だった。真新しい消しゴムがもの見事に小さくなり。女子は下敷きの汚れを消している始末。何ひとつ文句も言えなければ、この優柔不断さはずっと尾を引いた。

三. 中学時代

私が中学へあがる頃、父は独立して四方に学校が建ち並ぶ西陽木ひのきに店を持った。3坪程の店内とナメクジがいつもウヨウヨしていたキッチンに2畳の食卓とトイレがついて家賃は、1万円円といわれたのに父の見栄ツ張りは1・5万円支払っていた。

一方私は男子から「鉛筆のような足だ」と言われ、背中の中央まであつた髪を三つ編みにし、放課後は友達とお決まりコースのパン屋へ直行。お菓子作りに火がついたのもこの頃。私は痩せの大食い一日6食は当たり前。そして課外授業にも迷わず家庭科を選び、ぬいぐるみ作りやドーナツ作りの楽しかったこと！ そのぬいぐるみは後にスーパースターとなったNくんから、「これ、誰にあげるの？」と甘ったるい声で言われて、当時は男子も平気で泣かず、いつも先生に大目玉を食わされていた悪ガキだった。授業中席が隣り合わせだったこともあり、しょつ中「あれ貸して！」「これ貸して！」。そしてもう一人ぶっくりホッペに三つ編みがよく似合っていたS子ちゃん。彼女もスーパースターとなったが33年後、大波乱が起きる。

そしてクラスの男子だったTくんが、

「お前陽田のことが好きなのか」

「うん」

と答える姿がうーんと離れている所からビュンと目に跳び込んで来た。

母とスピーカー福子さんは近くのぶどう園にアルバイト。ところが母がちよつと席を外した隙に収穫したカゴの中から福子さん、ご自分のカゴに。福子さんにとってこんな事は朝飯前だった。

その後私は盲腸で一週間入院を余儀なくされたが、その院長は「盲腸切り」の異名を持つ人で、「お腹が痛い」と言うだけで「盲腸だ」と告げ、片っ端から切りまくっていた。その日、私と少し年輩の女性はベッドに横たわり「ニカッ」と笑みがこぼれるほど健康体？だったのを思い出す。

家庭科の授業2クラス40名ではスカートの製作があった。でも私ひとりだけ遅れをとり、これまでミシンを踏んだ事がなかった。先生は見かねて仮縫いなどしてお手本を見せてくださったものの少しも前へ進めず、近くにいた女子が「ミシンを踏んだ事がないんだって」と囁くのが聴こえてきたが、翌年には家庭科の先生から「この箸の持ち方で正しいのはどっち？」という恥辱に遭った。この先生のとった行動で私は小さな胸を痛め、またクラスの女子からは無視

されるようになり、もう転んでも（転びやすかった）手を貸してくれる人など無く、壮絶ないジメなどはなかったものの私は学校を休みがちになり引き籠りとなった。

すると担任のC先生が家にみえて、

「学校始まって以来の事です。出席日数が足りない。……習字教室をやっておれば良かったか。私に力が足りないのか」

正座して肩を震わせながら握り拳を押しあてると、泣かれてしまった。

私はいたたまれなく3年生で転校。隣県にある市立病院内にある複式学級でリハビリテーションから無料バスでの通学。消灯から点灯まで両足に牽引をしていた。

4坪ほどの教室には、1年生1人、2年生2人、3年生は私とより子の2人と、いずれも父と同年代の男先生が2人。しかし、またしても休み時間椅子に腰掛けている時、「後悔してないかい」と言う校長先生と秋元先生のお姿がどこからともなく目に跳び込んで来た。

ここは学習といっても、黒板にチョークでなぞる事も指名される事もよく見る光景など無く、先生が授業開始の時間になると参考書を解いた紙が配られるだけ。

皆静かに読書をしていると、より子（158cm、28kg、自律神経失調症）は毎日外来の姿見の前へ行きファツションモデルよろしく肩を揺らし眺めていた。先生は教室に現れないと「探しに行け!」。午前中だけの学習の30分はそれでつぶれていた。

より子以外の3人は、ネフローゼ、心臓病、腎臓病。腎臓病のシンくんは、私の変わりばえないお煮しめのお弁当を、「うらやましい」。より子は一日牛乳を10本与えられ、「見たくない」。

帰りのバスが来る2時までは一時間あり、職員室の脇に「ピアノ」を見つけた私は毎日童謡を弾いていた。

そして5月のこと。いつものように帰りのバス停に向かうと、

「このバス、リハビリテーション行き？」

と声を掛けてきた男がいた。男は160cmくらいで浅黒くパンチパーマをかけていた。

「自分は20歳で、交通事故で複雑骨折をし右足に金棒を入れる手術を受けた」

男は向かいの部屋へ入院して来た。私の部屋にはリウマチ、腰痛、脳梗塞の人がいた。ある日のこと、彼から病院の屋上に呼び出されたが近づいたその瞬間、不覚にもファーストキスを奪われてしまった。それが運が悪く通りがかった看護師の口から噂はあつという間に広がり、ふしだらな女と呼ばわりされて、父が呼び出され、

「ナースステーションに病院中の看護師が集まって、あんな顔から火の出る思いをしたのは初めてだ。抱かれたのか！」

その時のショックといったらなかつた。自分の娘も信じられないのか。そして夏休みは家へ

帰された。通知表には、音楽部員としてよく頑張った。成績はオール3。たぶん私以外の人もね。

2学期が始まったら、あの男と入れ替わりに17歳のジャーニーズ系のマスクをした男が入院して来たが、この男の所へは週末ともなるとかかとの高いサンダル履きと胸のほだけた服を好む女たちがドヤドヤやって来ていた。男は落ち着きがなく私の部屋をよく覗いていたが、「僕、麻里ちゃんのが好きなんだ」と言うと、とうとう部屋へ侵入して来て何と添い寝をしようとした。私は跳びはねお隣のおばさまに助けを求めた。するとお布団の中に入って来て出ない。彼も交通事故で片腕を複雑骨折。

学校では1ヶ月足らずで帰って行く転校生が数人。より子は少し身体を持ち直すと、休み時間は整形外科にいる同級生の男の部屋へ遊びに行くようになった。その後、より子と私は晴れて？卒業式を迎え、より子のお母様からは「ずっと仲の良い友達でいてくださいね」。

その時よぎったものは……。

四. 父の手伝い

私たち2人は進学はせず、より子は昼間働いて定時制高校へ進むはずだったが名古屋から2

日目には舞い戻り、私の方も父からNHKの高校通信講座を勧められたが3ヶ月と持たなかった。その後より子は料理学校へ通いながら住み込みで家政婦さんを始めていた。お嬢様が同級生という少々やりづらいお仕事。でもそこもすぐに辞め、私の方はご近所の長老から、「ぶらぶらしてるんだってねえ」という1本の電話からまた引き籠りとなった。とにかく恐くて恐くて外に出られなかった。

でも秋口、梨茂から、「姉ちゃん、キャンデイキャンデイ観に連れてって！」と急かされ少し元氣をもらって、パート勤めをしていた母と3人分の弁当を作りお店へ通えるように。でもまた周波数が乱れる事件が。

声が出ない

店内では声を立てて笑う父がいたが、私は目のやり場に困り果て小さくなるばかり。慣れるまで8年もの月日が流れた。私の仕事内容は、腕時計のバンド替え、貴金属のクリーニング、注文取り、POP、電話番会計。お店の営業時間は、母の勤務時間に合わせ8時から5時半まで。帰宅後の父は8時まで外商。